

1. 2022年度 自己点検自己評価改正の経緯

1) 学校評価委員 活動結果報告

表1 学校評価の年間活動状況

月	検討内容
6月	2022年度学校関係者評価の助言・提言の内容の確認 今年度の方向性、見直しの視点の抽出
7月	自己点検自己評価の小項目および評価の視点の見直し 特に評価点が低値である項目の表現に関する検討
8月・9月	大項目と小項目の内容の一致性、分類の検討
10月	自己点検自己評価の実施方法の検討
11月	自己点検自己評価の実施
12月	データ収集、データ分析方法の検討 3点以下の小項目および前年より0.2点以上下降した小項目の分析
1月	① 分析担当者ごとに内容分析（各委員が担当）の実施 ② ①終了後委員全員で分析内容の更なる検討
2月	データの解析方法の検討 本校研究アドバイザーへの相談 分析およびデータ表記方法の検討

(1) 改正の経緯

前年度の本校の自己点検・自己評価および関係者評価を含めた学校評価委員会の年間評価から、自己点検自己評価の客観性を高めること、評価結果を教員それぞれが効果的に活用できるようにするため、評価表の検討の必要性が示唆された。そこで、評価項目に対する教員の認識の誤差が少ない表現や評価の信頼性を向上することを目的に小項目および評価の視点の検討を実施した。

(2) 評価視点の精選

評価項目の検討に際しては、本校の実情に合っているか、信頼性が高い回答が得られる表現かの2点をもとに、①大項目の表題と小項目の内容の一致性と分類の整理、②小項目の内容を網羅する評価の視点で整理した。その結果、小項目は60項目から54項目に精選された。大項目Ⅲ、Ⅳ、Ⅵ、Ⅸの中にある小項目を大項目と一致するように再配置する、もしくは小項目は評価の視点に盛り込む事が適切と考えた。小項目の表現の変更が14箇所、評価の視点の表現の変更箇所が65ヶ箇所必要と判断し評価表の修正を実施した。そのため、前年と比較できない箇所は後の平均値では斜線で示されている。

(3) 評価分析について

前年度の学校関係者評価委員の皆様の中から助言および学校評価委員会の年間評価をもとに、データ処理を以下のように変更した。

前年までは、大項目・小項目ごとに平均値を算出し、過去のデータと比較し、更に数値をA(3.0～4.0点) B(2.0点から2.9点) C(1.0～1.9点)の3段階で表記し、BとCを分析していた。平均値だけでなく教員の回答などのばらつきの状況を見る必要性をご指摘いただき、標準偏差を算出した。

① タイプ別評価の導入

今年度も、前年までと同様に平均値を算出し、標準偏差も求めた。そのデータをもとに本校の研究アドバイザーに助言を求めた結果、評価した教員が21名とサンプル数が少なく、標準偏差の値を求めても正規分布を描くことができないため、意味をなさないことを指摘された。より効果的なデータ処理となる方法として、平均値および平均値の前年度との差を求めること、更にその差の幅をもとにタイプを7つに分類する方法を選択した。

2. 2022 年度 自己点検自己評価表の見方

1) 大項目の種類

- I 教育理念・教育目的・教育目標
- II 教育課程経営評価
- III 教授・学習・評価課程
- IV 経営管理課程・財務
- V 入学
- VI 卒業・就職・進学
- VII 地域社会・国際交流
- VIII 研究
- IX 危機管理・情報管理

2) 評価方法：4段階評価

評価尺度は前年と同様に4件法とした。

よく当てはまる：4点、当てはまる：3点、あまり当てはまらない：2点、当てはまらない：1点

3) 自己点検自己評価の分析方法：評価をタイプ別に分類し分析する

※評価タイプとその分類および特徴は以下表2に示す。

表2 タイプ別分類

タイプの種類	平均値および前年との変化	評価の捉え方
タイプI	平均値3.5以上かつ前年比0.2以上上昇	高評価
タイプII	平均値3.5以上かつ前年比0.2以内	高評価
タイプIII	平均値3.5以上かつ前年比0.2以上下降	高評価
タイプIV	平均値3.49～3.0かつ前年比0.2以上下降 前年までの状況や取り組みの違いを参考に調整を検討する	—
タイプV	平均値2点台 重点的に対策を検討する	低評価
タイプVI	平均値2点台かつ前年比0.2以上下降 前年より著しく下降している項目と分類できるため重点的に対策を検討する	低評価
その他	平均値3点台かつ前年比0.2以内	—
—	小項目および評価の視点の移動・変更により前年との比較対象データが存在しない	—

3. 結果 1) 全体の要旨

(1) 総括

2022年度は前年までの自己点検自己評価および学校関係者評価会議の結果受け、自己点検自己評価表の改正を実施している。小項目と大項目の相関性、小項目ごとの評価の視点の妥当性、さらに評価内容が他の小項目と重複していないかなどを見直しの視点とし検討している。結果小項目の統廃合と評価の視点を修正し小項目が60項目から54項目とし、大項目ごとの平均点は小項目の内容や数に差が生じているため前年までとは異なっている。

自己点検自己評価結果の分析に関しては小項目をタイプ別に分類し、早急に対処すべき項目、前年度との比較から注意すべき程度に低下している項目、評価値としては高値ではあっても前年度より低下している項目などにより7つのタイプに分類し、タイプ別の分析と課題、そして対策をまとめている。これにより、本校が次年度取り組むべき課題と対策が明確になり、自己点検自己評価による学校評価の意義を明確化することができている。

本年度の評価結果として、最初に自己点検自己評価結果全体の傾向を示す。3年間（2020年度・2021年度・2022年度）の自己点検自己評価の結果を大項目別に表で示しレーダーチャートで示しその推移を見てみると全体の傾向は前年までと同様といえる。しかし2022年度は全体的に低下傾向である。大項目の平均では全体に0.17ポイント低下している。評価全体に影響している要因としては大きく3つ挙げられる。

1つ目は今年度から新カリキュラムがスタートし、2年生・3年生は旧カリキュラムであることもあり、新旧同時にカリキュラムを進めていく必要があった。特に新カリキュラムに関しては単位数が3単位増え、その内容を教員全員が同様に周知することが難しかったことがあげられる。

2つ目は本校の組織構成要因が2極化しておりベテラン教員と経験の浅い教員に分かれている。そのため講義、実習、その他業務に関して個々人の能力差もあり量的な不均衡が生じていたことが評価を低下させている要因の一つと考える。これらの要因は研究活動にも影響を与えている。

3つ目は3年に及ぶコロナ禍の影響である。学習環境の制限やコミュニケーション不足等が生じ、それをなかなか打破できず学校経営管理課程全般に大きな影響を与えている。コロナ禍は地域貢献や研究活動にも強く影響し自己点検の評価の伸び悩みにつながっている。また本校の大きな課題である入学志願者の現象においても少なからず影響を与えている。

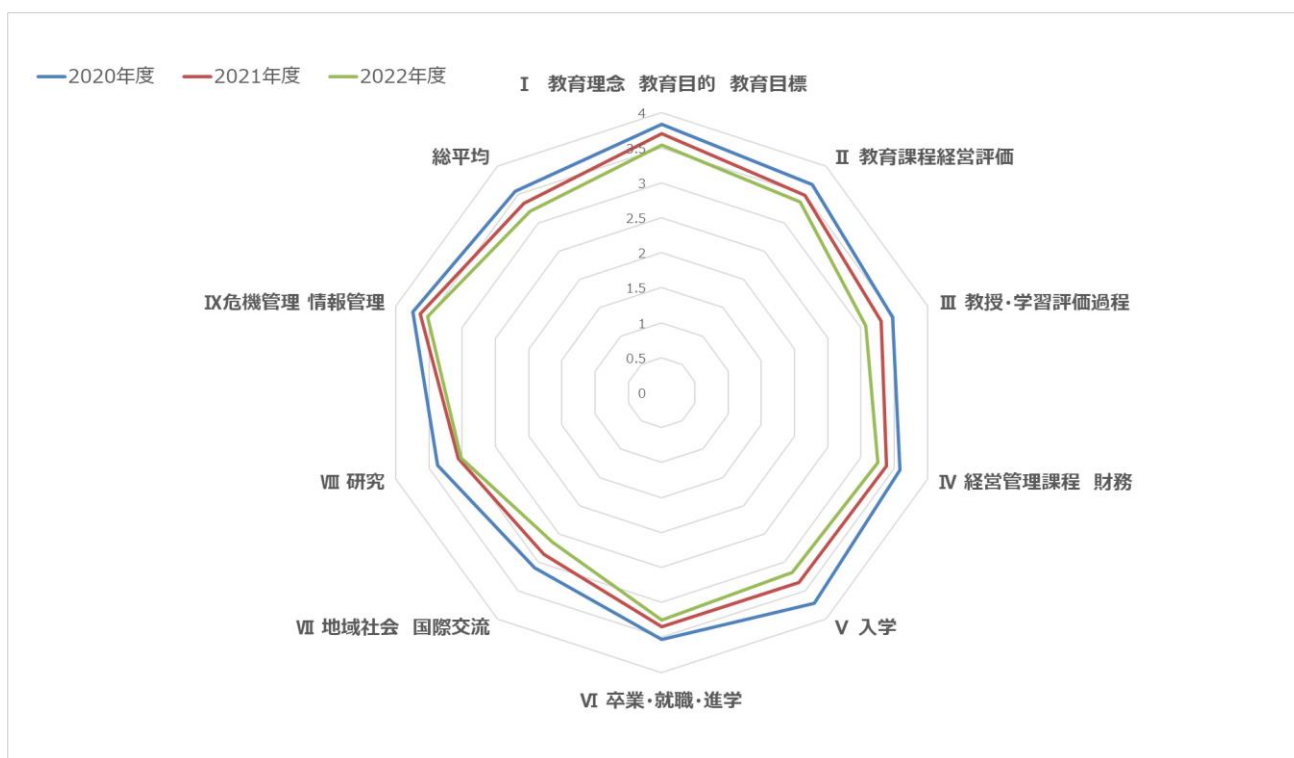
次に大項目別の特徴を示す。大項目は1項目を除きすべて3以上であり、高い評価で推移している。前年に続き低い値を示し注意すべき項目として3項目あげられる。最も低い値を示しているのが大項目Ⅶ「地域社会・国際交流」であり、これは前年と同様である。その要因として3年に及ぶコロナ禍の影響を受けている。地域のイベントへの参加数や本校からの情報発信数が減っておりこれが評価に大きな影響を与えている。

次いで低い値を示しているのは大項目Ⅷ「研究」であり、大きな要因はやはりコロナ禍の影響が大きく学会等に参加することも難しい状況であったことがあげられる。また研究に充てる時間をどのように捻出するかという個人の問題と学校組織として研究をサポートする体制が十分ではないことが要因といえる。

大項目Ⅲも低い傾向であり、特に小項目において最も低い項目を含んでいる。教員の時間管理についてはコロナ禍による影響に加え組織人員構成の特徴や新カリキュラム旧カリキュラム同時進行等の影響を受け評価が伸び悩んだものとする。またワークシェアが良好に機能していないことも評価を改善に向かわせることができない要因であったものとする。

(2) 過去3年間の大項目の推移 レーダーチャート含む

表3 2020年度・2021年度・2022年度 自己点検自己評価大項目平均点										
	I 教育理 念 教育目 的 教育目 標	II 教育課 程経営 評価	III 教授・ 学習評 価過程	IV 経営管 理課程 財務	V 入学	VI 卒業・ 就職・ 進学	VII 地域社 会 国際交 流	VIII 研究	IX 危機管 理 情報管 理	総平 均
2020 年度	3.84	3.67	3.48	3.59	3.72	3.53	3.1	3.37	3.74	3.56
2021 年度	3.7	3.49	3.3	3.38	3.35	3.35	2.86	3.06	3.63	3.35
2022 年度	3.54	3.37	3.07	3.25	3.18	3.25	2.65	3.02	3.52	3.21



2022年度 聖マリアンナ医科大学看護専門学校 自己点検・自己評価結果詳細

大項目	項目	評価項目	タイプ	2022年度	2021年度	2020年度	2022年度	2021年度	2020年度	【要旨】現状・分析	今後の課題・対策
				小項目平均	小項目平均	小項目平均	大項目平均	大項目平均	大項目平均		
I 教育理念・教育目的・教育目標	1	教育理念・教育目的・教育目標は法との整合性があり当校の特徴を表現している	II	3.65	3.84	3.9	3.54	3.70	3.84	<p>I 教育理念・教育目的・教育目標</p> <p>【要旨】</p> <p>結果は、評価点数：3.54である。大項目は前年と比較し、0.16ポイントの減少。小項目1・2がタイプII 小項目3がタイプIII 小項目4はその他であった。評価の傾向は前年までと同様である。小項目3に関してはカリキュラム改正に伴い、教育目標の見直しを行い、その中に示されている専門性の認識や周知が十分ではなかったことが要因として挙げられる。</p> <p>1. 現状・分析</p> <p>【到達度を示す指標が不明確】</p> <p>小項目1から4まで高い評価を示し、その傾向は前年までと同様といえる。その中で小項目3は前年より評価が低下している。第5次カリキュラム改正では新たにディプロマポリシーを示し、どのような能力を培ったものが看護の専門士（医療専門士）として認められるのか示している。それを達成するため教育目標を掲げている。小項目3の評価が低下している要因として、教育目標の周知が十分ではないことと、看護の専門性として示している自律性、倫理性、判断力、実践力についてその到達度を示す指標が十分ではないことが影響しているものと考えられる。また、小項目4に関しては大きな変動はないが、大項目Iのなかでは一番低い値であり、若干の低下がみられるのは教育目標の各学年の到達度の明示が十分ではないことが影響しているものと考えられる。</p>	<p>2. 今後の課題</p> <p>本項目における課題は以下の2点である。</p> <p>1) 教育目標を教職員全員が共通認識できる方法を計画的に実施する</p> <p>2) 看護の専門性を示す自律性、倫理性、判断力、実践力についてその到達度を示す指標を明確にする。</p> <p>カリキュラム改正に伴い新たに示した3つのポリシー、教育理念、教育目的、教育目標に関して周知する機会を持つ。学生への周知の方法として全体説明にとどまらず、講義や臨地実習、特別教育活動など様々な場面を通して各教員が意識的に伝えていく必要がある。そのため教員間での説明会や認識のずれを修正するミーティング等を定期的実施する。また看護の専門性として挙げている自律性、倫理性、判断力、実践力について臨地実習などの機会を逃さず伝え、学生自身が身をもって実感できることが必要である。その前提として看護の専門性に関しては教員間で議論し、それがどのように培われていくか理解し教員全員が意識的に取り組んでいけるようにする。</p>
	2	教育理念・教育目的・教育目標は学生の学校生活の活動指針となっている	II	3.60	3.74	3.9					
	3	教育理念・教育目的・教育目標には一貫した看護の専門性を明示している	III	3.55	3.84	3.9					
	4	教育目標は目標内容と到達レベルが対応し、具体的で実践可能な目標になっている	その他	3.35	3.37	3.7					
II 教育課程経営評価	5	教育課程編成は、教育理念・教育目的・教育目標と一貫性がある	その他	3.45	3.42	3.7	3.37	3.49	3.67	<p>II 教育課程経営評価</p> <p>【要旨】</p> <p>結果は、評価点数：3.37である。大項目は前年度と比較し、0.12ポイント減少。8つの小項目すべてにおいて高得点である。小項目9がタイプII、小項目6,7,8がタイプIVである。評価の傾向は前年と同様であるが、全ての小項目において評価が低下している。特に小項目6,7,8が前年との差が大きい。今年度の特徴として1年生は新カリキュラム、2,3年生は旧カリキュラムで進められている。新カリキュラム、旧カリキュラム混在することでそれぞれの理解における教員個々の理解に差がみられたことが要因として挙げられる。</p> <p>1. 現状・分析</p> <p>【旧カリキュラムと新カリキュラムの混在】</p> <p>小項目6,7,8が前年よりも低い値を示しているのは、今年度から新カリキュラムとなり、カリキュラム全体のねらい、分野ごとのねらい、科目一つ一つの到達点など教員全員が十分な理解に至っていないことが要因といえる。また教育理念、教育目的、教育目標、科目目標、授業内容との関連性と整合性をわかりやすく示すもの、カリキュラム全体の関連性、積み上げ方など体系的に示されているものがそろっていないことも影響していると考えられる。単位認定に関しても同様であり、教員個々の理解に差が生じていたことから前年より評価が低くなっているもの考える。</p>	<p>本項目における今後の課題は以下の3点である。</p> <p>1) カリキュラム全体の構造を提示する</p> <p>2) 単位認定の方法、教育課程全体の評価の方法を誰もがわかるものとして提示する</p> <p>3) 教育課程全体のフィードバックシステムを構築する</p> <p>カリキュラム委員会が中心となり、カリキュラム全体の関連性や積み上げ方について一目で見える形にしていく必要がある。またカリキュラムの到達状況と教育目標との関連も明確に示していく必要がある。単位認定の方法に関して、学生はもとより教職員が理解しやすいものを工夫し提示することが求められる。科目の評価時教育目標に戻れるようフィードバックの方法を明示しておく必要がある。全教員が同じ指標で講義や臨地実習の評価ができるよう、さらに課題が明確になり次につなげられるようなシステムの構築が必要とされる。</p> <p>対策として、カリキュラム全体の構造図を作成する。全ての授業と教育目標との関連性について誰もが一目でわかるものを示す。単位認定に関しても学生用、教職員いずれも一目でわかるものを全科目に関して示していく。自らが客観性の高いリフレクションができ、他者からのフィードバックが得られるようなシステムづくりを行い教育の質を向上させる。カリキュラム委員長が中心となり、カリキュラム委員会がその任を担う。</p>
	6	教育課程は体系的に編成されている	IV	3.40	3.63	3.8					
	7	科目と単元の構成に当たって、明確な考えと根拠があり、その考えは教育理念・教育目的・教育目標との整合性がある	IV	3.30	3.53	3.7					
	8	単位履修の方法とその制約が教員、学生双方がわかるように明示している	IV	3.20	3.42	3.7					
	9	単位・卒業認定の基準は明確になっている	II	3.55	3.63	3.75					
	10	他の教育機関との単位互換が可能な体制を整えている	その他	3.35	3.42	3.55					
	11	教育課程の評価体制が整えられている	その他	3.45	3.53	3.75					
12	教育課程の評価結果が、教育課程全体へのフィードバックシステムによって次年度に反映されている	その他	3.25	3.32	3.45						

2022年度 聖マリアンナ医科大学看護専門学校 自己点検・自己評価結果詳細

大項目	項目	評価項目	タイプ	2022年度	2021年度	2020年度	2022年度	2021年度	2020年度	【要旨】現状・分析	今後の課題・対策
				小項目平均	小項目平均	小項目平均	大項目平均	大項目平均	大項目平均		
Ⅲ 教授・学習・評価課程	13	教員としての専門性を発揮できるように教員の担当科目と時間数を配分している	V	2.50	2.60	3.05	3.07	3.3	3.48	<p>Ⅲ 教授・教育・学習・評価課程</p> <p>【要旨】</p> <p>結果は、評価点数：3.07である。</p> <p>大項目は前年度と比較し、0.23ポイント減少。</p> <p>小項目ごとの平均点は、9項目中2点台が3項目、3点台が6項目である。タイプ別では、小項目13.14がタイプVであり前年から0.12～0.13減少している。小項目15はタイプVIであり、前年から0.31と0.2ポイント以上の減少がみられている。大項目全体の傾向は前年までと同様の傾向にあり、評価の傾向は、【教員の負担の不均衡】【教員の能力格差】【学生との関わりの優先】【自己研鑽の不足】が低評価に影響を与えている。</p> <p>1. 現状・分析</p> <p>【教員の能力格差】</p> <p>小項目13、14は毎年低値であり、小項目14は54項目中最低値を示している。両項目共に教員個々の能力に対する業務量の負担をあげている。本校の教員の構成は、教員経験1～3年目6名、4～8年目1名、8年目以上の係長・科長補佐9名、科長以上5名で構成されている。看護専門学校の授業、実習、担当業務、委員会や係の担当は、学年の違いなどの要素を含み指導することは決してたやすくはない。2点台と評価した教員が評価を決定した要因を校長のフィードバック面接で確認した結果、自己点検・自己評価の視点よりも組織に対して改善を求める視点の教員もいたが、自身がもっとできたのではないかと考えて低評価としている教員がいることも明らかになった。現在の教員の経験年数からもわかる能力の格差はマニュアルの作成などだけでは解決が困難な点が多い。1～3年目の教員が自身の能力を向上するための教育体制の強化とその教員たちをサポートする経験豊富な教員たちによるサポートが今以上に必要となる。</p> <p>【教員の負担の不均衡】</p> <p>小項目13・14は共通して教員の持つ仕事量の不均衡を提示している。教員は授業の実施とその準備、実習指導とその調整、担当の業務や学生の面接を始めとする業務をそれぞれ担当している。小項目14の授業準備のための時間をとれる体制を整えているかについて、授業準備以外のチームで連携する仕事や会議を優先する結果、授業を準備する時間が確保されにくいことをあげている。授業時間や実習時間は個別の帳票で明らかにされている。更に業務分担を提示する帳票も存在しているが、その仕事の具体的な内容やそこに費やされる時間の具体的な検討はされていない。また教員個々がその時期に抱えている仕事内容も可視化されていない。それらの事が個々の教員の抱える状況を捉えられない現状につながり、不均衡が生じていることを担当者が感じている段階にとどまっている。前述した、能力の格差も含め各仕事の内容の精査と分担、更に繁忙期のワークシェアの方法の検討が必要になる。</p> <p>【学生との関わりの優先】</p> <p>教員が仕事内容の優先性を判断する順位が一番に学生との関わりがあげられる。実習を担当する際は7～8人の学生に対し1名がその任に当たる。一日の多くの時間を臨地での指導に費やし、その間に授業やその準備、会議に参加している。その他にも学校生活上の支援や授業時間外の学習サポートなど、教員であるが故に優先して対応している事が多い。これらも前述した2つの要因に関連し、小項目13.14の値を低下させている。今後4つの関連病院での実習を控える中、実習指導にあたる教員の負担の増加も考えられるが、学内に残り学生を指導する教員への負担も集中することが予想される。そのため、臨地実習での指導者との連携体制の強化や学生への指導方法の検討が必要となる。</p> <p>【自己研鑽の不足】</p> <p>コロナ禍以降、各種学会や研修が中止もしくはon-lineとなり、本校教員の参加も激減している。一部の教員が学会でのon-line発表を実施しているが、その状況は回復していない</p> <p>期を同じくして研究授業の対象者がいかなかった事もあり 公開授業は2022年</p>	<p>2. 今後の課題</p> <p>本項目における課題は以下の5点である。</p> <p>1) 教員の能力格差を改善するための教員の教育体制の更なる構築</p> <p>2) 仕事内容が能力に見合った形となるような調整</p> <p>3) 仕事内容の見える化と教員のワークシェアの体制づくり</p> <p>4) 教員間・臨床との連携や協力の体制づくり</p> <p>5) 教職員のレベルアップにつながるシステムの構築と場作り</p> <p>教員の能力を本校のラダーを通して確認しているが、具体的な仕事内容との相関が明確ではないため、教育体制の構築とともに、段階ごとに可能とする内容と範囲、量を検討し、配分する。そのためには、担当領域の授業やその準備、実習での指導内容、業務ごとの内容と量、繁忙期について可視化する。また、教員でなければならない仕事を明確にすることが事務職員や臨地の指導者との協力の前提になるため精査する。更に教職員がレベルアップでき、研究へ取り組む機会や研修に参加することで相互に研鑽できていると感ぜられるシステムの構築と場の提供を早急に実現する必要がある。</p>
	14	教員が授業準備のための時間を取れる体制を整えている	V	2.20	2.32	2.75					
	15	教員の相互研鑽を保持する体制がある	IV	2.80	3.11	3.2					
	16	実習目的・実習目標を達成するために実習施設の選択を行っている	その他	3.30	3.42	3.55					
	17	授業は、学生の学習が深化、発展するための方法を意図的に選択し実践している	その他	3.20	3.22	3.4					

2022年度 聖マリアンナ医科大学看護専門学校 自己点検・自己評価結果詳細

大項目	項目	評価項目	タイプ	2022年度	2021年度	2020年度	2022年度	2021年度	2020年度	【要旨】現状・分析	今後の課題・対策
				小項目平均	小項目平均	小項目平均	大項目平均	大項目平均	大項目平均		
	18	効果的な教授のために単元内容の情報共有を実践している	その他	3.35	3.44	3.2				<p>別を同じくして研究授業の対象者がなかった事もあり、公開授業は2021年度から本格的に再開しているが、協議会を含む研究授業が開催されていないことで、入職後3年目までの教員が授業の構築や授業方法について検討する場を設けることがなかった。また、「授業研究を領域内などで行いたい」との要望もあり、全ての教員の能力向上のためにも場の提供と教員のレベルアップに向けたプログラムの構築が必要になる。</p>	
	19	評価計画を立案し、実施している	II	3.50	3.56	3.75					
	20	評価結果に基づいて、実際に授業を改善している	その他	3.40	3.33	3.65					
	21	シラバス及び実習要領には一貫性があり、指導されている内容は学習への動機づけと支援になっている	その他	3.35	3.50	3.75					
IV 経営管理課程・財務	22	将来構想を実現するための計画を明示し、周知している	その他	3.10	3.26	3.45	3.25	3.38	3.59	<p>IV 経営管理課程・財務 【要旨】 結果は、評価点数:3.25である。 大項目は前年度と比較し、0.13ポイントの減少。 小項目32と34はタイプVである。小項目29・35・36・37・38はタイプIVである。小項目33は前年より評価が上昇した項目である。小項目26は今年度新規に取り入れている項目である。評価の傾向は前年までと同様といえる。しかしながら全体的に評価が低下している。長期化するコロナ禍の影響、学習支援の効果、学校組織運営に関する周知、情報発信の活用が主な要因として挙げられる。 IV 経営管理課程・財務1. 現状・分析 【長期化するコロナ禍の影響】 小項目32番と34番はタイプVであり低評価であり、さらに前年より低下している。要因として3年にわたるコロナ禍の影響を強く受けている。特に学生が自由に使い、語り合える環境に制限がかけられていることが要因といえる。制限をいつまで行うのか、解除の目安は、誰がどのようにその判断を行うのかなどが不明瞭であることも評価を下げている要因といえる。これは学生の不満にもつながっている。また小項目34の評価の視点に示す学生の意見を定期的に収集し、可能なものから反映しているに関しては、学年窓口を明確にし、学生の意見を聴くツールを作成し学生の思いを聴くことは徐々にできている。しかし学生の意見への対応については十分であったとはいえない。そのため評価が伸び悩んだものと考え。 【学校組織運営に関する周知】 小項目29に関しては前年より低下している。これは学校組織運営に関する様々な規定や決り事に関して全教員が同様のレベルで周知するに至っていないことが要因といえる。特に倫理規定に関する規定は教員個々の意識の高さとそれを強化するための取り組みを学校組織として実施していなかったことが影響している。 【学習支援の効果】 小項目35に関しては低評価ではないが前年より学習支援に費やす教員人数を減らしていたこともあり、学習支援に費やす時間と労力が十分ではなかったことが考えられる。学習支援を保証人も巻き込んで実施するため、学年ごとに保証人の会を実施している。また学力の振るわない学生、学生生活上気になる学生は保証人を交えた3者面談を実施しており、その結果を教員間で情報共有している。しかしそれをどのようにその後に活かしていくかに関しては十分な議論がなされていない。経済的支援は神奈川県下の支援や奨学金制度を活用しているが、教職員への周知が十分ではなかった可能性がある。小項目36の就職活動に関しては、現状で考えられるサポートはしているが、教員全員での周知不足と考える。就職活動、奨学金に関しては校長・副校長中心となりサポートしている状況であり、他の教員との情報共有を行いサポートの幅を広げる必要がある。 【情報発信とその効果】 小項目37に関してホームページは11月にリニューアルしており、その後はオンタイムに情報提供できている。しかし時期的に遅れたことで十分な効果を得られなかったものと考え。保証人メールの活用は校長からの長期休暇前のメッセージや緊急時の連絡等になっており、学習面や生活面への効果的は情報提供の場にはなっていない。</p>	<p>2. 今後の課題 本項目の課題は以下の4点である 1) 長期化するコロナ禍による様々な制限の必要性を状況を確認して見極めて解除していくシステムを作る 2) 法人・学則・内規・学校独自の規定を全教員が同様に周知する方法を構築する 3) 十分な人員を費やし学習支援を効果的に進めるとともにその評価を行う 4) 情報の共有と発信をタイムリーに行いその効果をデータとして収集する 長期化するコロナによる制限を解いていく方法を早急に検討し、具体的な段階を示す。制限解除の時期を決める基準も示す必要がある。そのための定期的な評価を実施する。規制の実施、緩和、解除、撤廃までの責任者を決め、学校として決定をタイムリーに行う。学校組織運営、様々な規定に関して教職員が十分に理解する方法を構築し、それを周知する機会を定期的に持つ。説明会、事例検討会、意見交換会などを実施する。 学習支援に費やす教員人数倍に増やし学年ごと徹底的に段階的な学習支援を実施する。特に国家試験対策は計画に基づき成果を確認しながら1年間の運営を進めていく。国家試験対策の課題が何か、計画の見直しは必要か、責任者の役割と責任、実際のアクションプラン、学習支援国家試験対策におけるマネージャー、リーダー、メンバーの役割責任、実際のプランが必要である。評価の時期と修正が必要な場合の進め方を示す。 経済的支援に関しては様々な支援を学生はもちろん教職員にも周知し学生への指導につながるようにする。2023年度から専門実践教育給付金の認定校となったため教職員間で共有し社会人経験者の学生支援に繋げる。学生の経済状況などをタイムリーに知っていく手立てと教員間の周知を徹底する。 情報の共有と発信をタイムリーに実施することが現代ニーズに応えることであり重要である。リニューアルしたホームページの運用を効果的に実施する。そのための責任者を決定し、その教員を中心に有効活用する。保証人メールの活用を再検討し、どのような場面で使用できるか協議し決定する。保証人を交えた面接を実施し情報を共有しその後の対策が教員間で十分検討し効果的な教育に繋げる。またホームページ等で公表した後の周知の方法と公表後の反応を確認できる方法を検討する。</p>
	23	教育目標の達成状況を多面的に把握している	その他	3.45	3.47	3.75					
	24	国家試験対策が明確であり、組織的・計画的に取り組んでいる	その他	3.35	3.42	3.65					
	25	学校の組織図、会議、係り等の役割について明示している	その他	3.00	3.16	3.75					
	26	各教科の学習目標達成に向け、教員、講師の任用・配置をしている	—	3.30							
	27	人事給与に関する規定等が明示されている	その他	3.45	3.37	3.74					
	28	教職員・講師の資質向上のための考え方や対策を明示している	その他	3.15	3.21	3.5					
	29	教職員の倫理に関する規定を明示している	IV	3.25	3.58	3.75					

2022年度 聖マリアンナ医科大学看護専門学校 自己点検・自己評価結果詳細

大項目	項目	評価項目	タイプ	2022年度	2021年度	2020年度	2022年度	2021年度	2020年度	【要旨】現状・分析	今後の課題・対策
				小項目平均	小項目平均	小項目平均	大項目平均	大項目平均	大項目平均		
	30	教職員の福利厚生に関する規定を明示している	その他	3.45	3.61	3.75				<p>保証人を交えた面接を実施し、保証人との情報共有の場としては十分効果がみられている。小項目38は、学校運営やその評価をホームページ、ポータルサイトへ公表している。多くの方に本校を知ってもらう場として機能しているかについては明確ではない。</p> <p>【その他】 小項目25に関しては高い値とはいえない。会議の進め方、時間の使い方などが課題としてあげられている。小項目33は全評価項目で唯一評価点が上がった項目である。この内容は実習に特化した内容であり管理面を中心とし実習に関する準備、調整含め十分行われていたといえる。</p>	
	31	予算計画、年間事業計画を策定し、適正な予算の執行・進行管理を行っている	その他	3.25	3.44	3.55					
	32	教育目的達成の為に施設・設備、教材を整備し、活用している	V	2.90	3.01	3.4					
	33	実習目標達成のために実習施設との協力体制を整備している	I	3.50	3.21	3.17					
	34	学生が休憩、親睦、交流等を行える場とスペースがある	V	2.60	2.56	2.85					
	35	学生の学修支援体制を整えている	IV	3.10	3.33	3.55					

2022年度 聖マリアンナ医科大学看護専門学校 自己点検・自己評価結果詳細

大項目	項目	評価項目	タイプ	2022年度	2021年度	2020年度	2022年度	2021年度	2020年度	【要旨】現状・分析	今後の課題・対策
				小項目平均	小項目平均	小項目平均	大項目平均	大項目平均	大項目平均		
	36	学生生活、進学、就職に関して学生の相談に応じている	IV	3.40	3.67	3.75					
	37	教育・学習活動に関して、保証人への情報提供を行っている	IV	3.35	3.67	3.6					
	38	学校運営及び評価の結果を公表している	IV	3.50	3.78	3.8					
	39	自己点検、自己評価の意味と目的・方法を明示している	その他	3.40	3.44	3.65					
V 入学	40	入学者選抜は教育理念・目的・目標を反映させた方法で実施している	IV	3.15	3.44	3.7	3.18	3.35	3.717	V 入学【要旨】 結果は、評価点数:3.18である。 大項目は、前年度と比較し、0.17ポイントの減少。 小項目ごとの平均は3点前半であり、タイプ別では小項目40がタイプIVである。1. 現状・分析 【データ分析の不明確さ】 3項目ともに評価に挙げられている内容は、入試の実際、入試結果、広報活動に対する結果が全教員へデータとして提示されていないことである。入試に関する活動は入試委員会を中心に、その他の教員の協力体制のもとに全教職員で実施しているが、入学試験後の会議報告が主になり、委員以外の教員のニーズに答える内容となっていない。次年度は広報活動なども含めてコロナ前とほぼ同等の水準で活動することから、全教職員へのデータおよびその分析結果、更にそれらから導き出された方針の周知が必要となる。 【広報活動への情報不足】 コロナ禍3年目、徐々にオープンキャンパス等を拡大して実施してはいるが、入試委員以外は部分的な参加となっていることに加え、on-line、ハイブリッドの併用などから実際に参加者に触れる機会の減少などが広報活動への情報不足を招いている要因の一つとも考えられる。更に、コロナ禍の3年間に本校に移動、入職した教職員が来春には全教職員の1/3を占めるため、運営内容の具体的な周知や協力体制の構築が必要となる。	【広報活動への情報不足】 コロナ禍3年目、徐々にオープンキャンパス等を拡大して実施してはいるが、入試委員以外は部分的な参加となっていることに加え、on-line、ハイブリッドの併用などから実際に参加者に触れる機会の減少などが広報活動への情報不足を招いている要因の一つとも考えられる。更に、コロナ禍の3年間に本校に移動、入職した教職員が来春には全教職員の1/3を占めるため、運営内容の具体的な周知や協力体制の構築が必要となる。
	41	入学者状況、入学者の推移について分析し、検証している	その他	3.10	3.28	3.75					
	42	組織的、計画的に応募確保に取り組んでいる	その他	3.30	3.33	3.7					
VI 卒業・就職・進学	43	卒業時の到達状況を捉える方法が明確であり、計画的に実施している	IV	3.25	3.67	3.63				VI 卒業・就職・進学要旨】 結果は、評価点数:3.25である。 大項目は前年度と比較し、0.1ポイントの減少。 小項目ごとの平均点はともに3.25である。タイプ別では、小項目43がタイプIVであり、前年度から0.42ポイント減少。小項目44は今年度改正された項目である。 評価の傾向は【評価の視点が示されていること】に対し高い点数を示したが、【業務担当の変更】【分析の視点が曖昧であることや卒業後の進路の把握しづらさ】が低い点数に影響を与えた。1. 現状・分析 【評価の視点が示されていること】 前年度より、評価視点の見直し変更を行い各自がより具体的にイメージできるような視点としたことを効果的だと評価している。教育目標は卒業時の特性であることや教育目標のみならず、実習目標評価としたこと、休学退学者等の減少に向けた対策として、業務担当再編成が行われたことが、より具体的に浸透した結果といえる。国家試験は100%の合格を実現し、また、卒業後の支援体制では、入職後一度も経験したことのない教員が今年度初めて里帰り会の実施による経験を得たことも高い点数を示す要因となったと考えられる。	2. 今後の課題 タイプ別から見た「高評価とはいえない」本項目における今後の課題は以下の3点と考える。 1) 業務担当の継続化へ 2) 分析方法・結果開示方法の具体化と明確化 3) 進路指導担当の明確化とその方法開示・卒業後の進路の開示方法 業務担当が継続されることで、学生への指導方向が一定となり卒業時の到達目標に対する評価も各々の教育観だけではなく、学校の教育方針に基づく評価へと方向性が定まってくると考えられる。永遠に継続するのではないとしても、学校の方針に示される業務方法に基づき実践することで改善が期待できる。 項目の内容や評価の視点は、明確であると考え。分析方法の適性が示されることで、導き出される結果がより明確となり、修正される内容を具体的に捉えることが可能となる。分析方法について検討を行い、より学生が自己の目標として卒業時の特性を到達することができる支援体制が強化されることになる。 進路担当業務について、担当を検討する。進路指導や卒業後の進路について、教員全体への周知を徹底していくことを実践するだけで大きく結果が異なっていくこととなる。

2022年度 聖マリアンナ医科大学看護専門学校 自己点検・自己評価結果詳細

大項目	項目	評価項目	タイプ	2022年度	2021年度	2020年度	2022年度	2021年度	2020年度	【要旨】現状・分析	今後の課題・対策
				小項目平均	小項目平均	小項目平均	大項目平均	大項目平均	大項目平均		
	44	卒業後の就職、進学に向けた確かな支援を実施している	—	3.25			3.25	3.35	3.53	<p>【業務担当の変更】 小項目43について、当校は担当が変更されることが多く、今年度も業務体制が変更となった。担当が変更されることにより、業務に対する取り組み視点が個々によって異なり、経験年数が豊かであればあるほど、教員の教育観看護観が重視された趣がある。一方、新入職者や経験年数が浅い教員は、教育に対する希望や夢を持つことや逆に業務内容を理解し実践するのに時間を要す傾向があることにより、点数が低くなるのではないかと考えられる。業務体制の年ごとの変更は、一長一短であり、評価視点が示された項目として効果的であるとした内容分析と反することになる。</p> <p>また、業務変更について、前年度は1年次から3年次迄同じ卒業時の到達目標を評価目標としたが、今年度は各学年生への変更に伴い、学年担当教員が独自に学年に応じた目標設定となり、継続した評価分析が明確に示されない状況となっていることが影響したのではないかと属性ごとの平均も含め考える。</p> <p>【分析の視点が曖昧であることや卒後の進路の把握しづらさ】 学校目標や実習評価はアンケート(4段階形式・自由記載)形式で収集されたデータを単純集計し、自由記載については具体的な評価が示されていない。データ収集方法として、分析については改善が必要である。また、小項目44に関する卒後の進路については、概ね関連施設への就職だが、その内訳やその他進学を希望している学生の動向が見えてこないことが多い。進路について具体的な指導を行う教員が管理職となっていること、ここからの情報が周知されない現状がある。</p>	
VII 地域社会・国際交流	45	地域のニーズを把握し、社会への貢献を組織的に行っている	V	2.50	2.56	2.8				<p>VII 地域社会・国際交流【要旨】【要旨】 結果は、評価点数:2.65である。 大項目は前年度と比較し、0.21ポイントの減少。この大項目は3か年連続の平均点の低下、大項目で最下位項目である。 小項目45は平均点2.50、タイプ別ではタイプV、前年より0.06減少。 小項目46は平均点2.80、タイプ別では、タイプVI、前年より0.37減少である。 評価の傾向は【評価の視点に具体内容が示されたこと、または示されていないこと】【コロナ禍による地域交流の機会の減少】【地域貢献に関する当校の取り組みが明確化されていないこと】【国際交流センター等の活用におけるシステムがない】が低評価結果に影響を与えた。</p> <p>1. 現状・分析 【評価の視点に具体内容が示されたこと、または示されていないこと】 前年度、評価の視点の見直しを行った。小項目45、46、では、新たに目指すべき取り組みについて具体的な組織名を評価の視点に追加した。しかし、川崎市看護協会関連のイベントや行事は近年中止になっていること、また、国際交流センター等の活用の推進については今後取り組むべき内容であり、今年度は実施されていないことが低評価に影響したと考える。一方、地域貢献において、今年度実施した中学校の職業訓練、高校訪問、学生会会費の寄付など、具体内容が示されておらず低評価に影響したと考える。</p> <p>【地域貢献に関する当校の取り組みが明確化されていない】 小項目45では、属性ごとの平均点が、経験年数1～3年は、平均点2.33と低評価である。コロナ禍以降に入職した教員は地域貢献の行事やイベントがほぼ中止となり体験していない。コロナ禍であるために社会への貢献を行う機会が減ったと認識する4年目以上の教員と、社会への貢献を組織的にしているのかわからないと認識する1～3年目と評価に違いがみられたと考える。また、今年度はオープンキャンパスの回数を増やし県内外の高校生に向けた交流の機会を増やしたり、菅生中学校の職業訓練を受け入れ、学校見学や授業に参加することができた。しかし、地域貢献に関わる公開講座や教育訓練、ボランティアなどは中堅以上の教員が携わっているため周知されにくい状況となっている。また、学生会予算等の余剰金を、毎年震災復興支援や聾唖協会、ユニセフなどに寄付をしているが、地域貢献との関連などの明文化がされていない。</p> <p>【国際交流センター等の活用におけるシステムがない】 第5次カリキュラム改正に伴い、当校も新カリキュラムがスタートしている。国際的視野を広げる目的で、1年次の基礎科目に英語、異文化コミュニケーション、文化人類学、3年次に看護の統合と実践 I に国際保健が組み込まれているが、現在、国際交流の実施や国際交流センターの活用はしておらず、教育計画や導入に向けたシステムがない。</p> <p>【コロナ禍による地域交流の機会の減少】 感染拡大前は、5月に実施の学校祭で地域の方々が来校し、学生による血圧測定の実施等を行っていた。12月のキャンドルサービスでは、本院関連病院のほか近隣の介護老人福祉施設に行き、利用者の方へ学生が歌を歌って施設を回る行事を実施しており、施設からも歓迎を受けていた。また、実習施設である子育て支援センターや老人福祉センターから介護予防ボランティアなどのお話をいただくこともあったが、中止となっており参加の機会が減少している。</p>	2. 今後の課題 本項目における今後の課題は以下の2点と考える。 1) 教育活動としてシステムを構築し年間計画を立てる 2) 地域貢献・地域ボランティア・国際交流センター等との活動の開拓 地域貢献や地域ボランティア活動の当校の現状は受容姿勢である。年間教育計画に組み込み、能動的な姿勢として発信していく必要がある。地域から求められているボランティアをはじめ、川崎市看護協会との連携、川崎市の公開講座、学生が参加できるボランティア募集の可視化、地域の小中学校の職業体験等のキャリア教育との連携、地域住民への公開講座、学校祭やキャンドルサービス等学校行事における交流、について計画立案する。また、他校で実施されている、地域住民が模擬患者として参加する授業なども検討していきたい。年間計画の周知を目的とした具体的な活動内容を評価の視点に追加していく。 国際交流においても、能動的な計画や交流するためのシステムがない。まずは、国際的視野を広げるために、世界情勢や当法人の推進内容などからSDGSに関する活動や生命をテーマに教育活動を検討したい。方法としては国際交流センターの活用、卒業生の国際活動の機会の活用、当法人や医学部の国際交流の窓口へ依頼しリモートでの交流など検討していきたい。
	46	国際的視野を広げるための授業科目・システムを整えている	IV	2.80	3.17	3.4	2.65	2.86	3.1		

2022年度 聖マリアンナ医科大学看護専門学校 自己点検・自己評価結果詳細

大項目	項目	評価項目	タイプ	2022年度	2021年度	2020年度	2022年度	2021年度	2020年度	【要旨】現状・分析	今後の課題・対策
				小項目平均	小項目平均	小項目平均	大項目平均	大項目平均	大項目平均		
Ⅷ 研究	47	教員の研究活動を保証している	V	2.80	2.78	3.15	3.02	3.06	3.37	<p>Ⅷ 研究</p> <p>【要旨】</p> <p>結果は、評価点数：3.02 である。</p> <p>大項目は前年度と比較し、0.04ポイントの減少。</p> <p>小項目47は平均点2.80、タイプ別ではタイプV、前年より0.02増加である。</p> <p>小項目48は平均点3.00、前年より0.17減少。</p> <p>小項目49は平均点3.25、前年より0.03増加である。</p> <p>評価の傾向は【評価項目や評価の視点の表現が自己点検になっていない】</p> <p>【時間の確保が困難】【研究活動のサポート体制の不足】【紀要投稿の継続】が評価結果に影響を与えた。</p> <p>1. 現状・分析</p> <p>【評価項目や評価の視点の表現が自己点検になっていない】</p> <p>自由記載の内容から、自己の活動や意識に対する評価は得られず、学校に対する他者的評価となっている回答があった。一部の教員は、評価項目や評価の視点の表現から自己を評価する目的が周知されずに回答していると考えられる。</p> <p>【時間の確保が困難】</p> <p>小項目47は、前年比が0.02上昇しているが、一前年では0.35低下している。自由記載の内容から時間の保証が得られていないという認識が多い。研究に費やす時間・研究日が設けられていない、個々の判断に委ねられているとの自由記載から、研究活動の時間的保証について不明瞭であると考えられる。現在、紀要担当、研究推進活動の役割が分業しており、研究活動が業務の一部であるという認識が希薄している。また、認識はしているが、業務量が多く研究活動ができない、余裕がない、という自由記載から、保証されていないという認識につながっている。</p> <p>【研究活動のサポート体制の不足】</p> <p>小項目48は、前年比が0.17低下している。本校では、倫理委員会の設置、研究費用の確保、研究に取り組むための環境（メディア・文献）に関しては整備している。しかし、他大学等との研究ネットワークや研究活動を推進するための体制としては、紀要の発行に留まっている。学会誌や看護協会等の定期的な広報等の共有をしているが、研究に取り組むかは個々に委ねられている。研究推進するための体制や周知が不足しているといえる。</p> <p>【紀要投稿の継続】</p> <p>小項目49では、前年度より0.03点、上昇している。評価の視点に「紀要を毎年発刊する」と具体的に明記してあり、実践されていることで評価に影響したと考える。しかし、コロナ禍により研究成果を発表する機会が減っており、学会発表や学術誌への投稿に対する高評価の自由記載はないことから、研究活動の成果を発表する機会が減っていると評価する。</p>	<p>2. 今後の課題</p> <p>本項目における今後の課題は以下の2点と考える。</p> <p>1) 研究活動の推進のための体制整備と発信</p> <p>2) 業務改善</p> <p>2020年度の業務役割に、①キャリアラダー、②教員研修、③授業研究、④研究推進を担うキャリアディベロップメント委員会が置かれていた。この年の大項目の評価点数は3.30であった。教員の研究活動がキャリアアップに必要であること、教員役割であり業務の一部であることの意識付けとなるよう取り組んでおり、周知、共有の目的で可視化されていた。委員会という体制があることにより、研究活動が業務であるという認識や研究活動を行う動機づけになっていたため、今年度の体制の見直しが必要である。その中で、研究費の確保や研究のためのメディア活用方法を合わせて周知させ、業務として位置付けていくと共に、個人に研究を課すことが、業務量の負荷になる可能性を考慮し、チームでの研究活動を推進していく。</p>
	48	教員の研究活動を助言・検討する体制を整えている	その他	3.00	3.17	3.5					
	49	研究活動の成果を発表している	その他	3.25	3.22	3.45					

2022年度 聖マリアンナ医科大学看護専門学校 自己点検・自己評価結果詳細

大項目	項目	評価項目	タイプ	2022年度	2021年度	2020年度	2022年度	2021年度	2020年度	【要旨】現状・分析	今後の課題・対策
				小項目平均	小項目平均	小項目平均	大項目平均	大項目平均	大項目平均		
IX 危機管理・情報管理	50	災害対策が整っている		3.45	3.67	3.75	3.52	3.63	3.74	<p>IX 危機管理・情報管理【要旨】 結果は、評価点数:3.52である。 大項目は前年と比較し0.11の減少。 小項目は全て3点台である。タイプ別では小項目50がタイプIVであり。前年度より0.22減少している。</p> <p>1. 現状、分析 【対策の整備】 危機管理・情報管理全般に対してマニュアルが整備されていること、連絡・調整に方法などの管理体制が整っていることをあげ評価している。また、今後の学校管理体制の変化などを想定した対応の必要性を示唆した内容もあり、危機管理、情報管理に対する意識が高まってきている。</p>	<p>2. 今後の課題 本項目における今後の課題は以下の2点と考える 1) 状況の変化に応じた対策の強化と周知 2) 状況に応じた体制の整備 状況の変化によりマニュアルの変更が頻繁に行われる事や、変化する内容への自身の認識の不確かさを感じている教員もおり、アップデートされた内容の効果的な周知方法も検討が求められる。更に、統一して実施している内容が周知されていないことも一部にみられることから、周知の方法やマニュアルなどの保管方法の確認が必要となる。</p>
	51	学校安全対策が整っている	IV	3.35	3.50	3.8					
	52	学校保健安全法に基づく対策が整っている	その他	3.65	/	/					
	53	情報管理の体制が整っている	一	3.50	3.67	3.6					
	54	緊急連絡方法を整備している	II	3.65	3.78	3.85					